

巻 頭 言 「CAUAの十年」

麗澤大学教授、CAUA会長
林 英輔

CAUAの機関紙VIEW POINTが創刊されたのは2001年3月であり、今号は第9号になる。号数と刊行年の西暦表示の下二桁が一致するので、号数は大変覚えやすい。今年CAUAが設立されて十年目に当たる。私は当初から会長をつとめさせていただいているので、ほぼ十年、CAUAと共に歩んできたことになるが、私自身のインターネットとの関わりは今年で二十年目になるので、この後半をCAUAと共に歩んできたことになる。そして今年度末で会長を退任するので、非常に思い出しやすい活動期区分になった。CAUAは、わが国にある情報システムベンダーの大学ユーザー会としては、最も歴史が短い会であり、設立当初の活動はよちよち歩きであったように思い出される。それが、いつの間にか、ユーザーの枠組みを超えて、多くの大学の方々、当然他ベンダーのユーザーの方々の間でも広く関心を持たれるような内容の研究会を毎年開ける会に成長し、学会の研究会と同類の学術的な会合とも見なされるようになってきたことは大変喜ばしい。CAUAの活動は、年に一回、分科会とオープンシンポジウムを開催し、機関紙VIEW POINTを発行することが内容である。分科会は、ユーザーによる研究、教育、センター運用や図書館運用の研究発表や、共通の関心事についての外部講師の講演会だったりする。オープンシンポジウムは、会員以外にも公開されており、地域情報化に関連のある話題についての講演と討論の会である。VIEW POINTは、当初は分科会の報告が主な内容であったが、この数年は、オープンシンポジウムと分科会の双方の報告が掲載されている。報告といっても、会の中で発表された報告、講演、討論などが活字におこされており、格好の研究資料の役割を果たすので、ユーザーのみならず、外部の参加者にも好評である。

この第9号は、昨年11月に山梨県甲府市のホテル談露館で開催された「CAUAシンポジウム2008 in やまなし——安心・安全の地域作りを考える～医療情報化が地域を救う！——」及び、昨年10月に四谷の主婦会館プラザエフで開催された「CAUA第7回合同研究分科会 ITがあるから、大学は変わる！」、昨年6月開催の「大学における電子メールを再考する」の報告の内容で構成されている。回顧してみると、医療情報化のテーマは、一昨年札幌で開催されたオープンシンポジウムのテーマでもあったが、札幌での内容は医療情報化の分野での医学界の先進的な指導者の先生方の講演が主体であったのに対して、今回は、山梨県という国内では情報化が比較的進んでいる地域の中で、地域医療の情報化の進展、慢性疾患支援システムによる医療連携、地域の保健医療における情報の活用等、これまで他の地域では見られなかった内容の実践例が紹介された点で、ITを活用した地域の住民の医療環境の具体的な改善内容が変わってきていることを考えて、医療情報化の課題への取り組みへのCAUAの議論が、この一年で着実に前進したと感じられた。研究分科会では、今回は、深澤良彰先生による基調講演「早稲田大学の情報化戦略」の他に、「大学改革」、「教育研究」、「ソリューション」の三つの分科会を並行して開催した程、豊富な内容のオムニバスであったが、その中でも、基調講演と「大学改革」トラックではCAUA会員の共通の関心に応える内容であったし、「教育研究」トラックは大学の情報環境の構築・運用及び教育コンテンツの事例報告の講演であったが、関心がある会員にとっては、後で詳細を理解・検討したい内容があるに違いなく、そこは、VIEW POINTのこの号が応えてくれる筈である。このようにVIEW POINTは、大学運営、研究・教育のための専門知識の資料集の役割を果たしているわけである。このため、最近、会員以外の大学人の間でも、この価値に気付いて、活用されたり、研究論文の中で引用したりした例を見かけるようになったことは大変喜ばしい。一方、このために、裏方では、講演の録音やスライド資料から、講演内容を論文や報告の形の活字資料を起こすための作業を、滝島事務局長をはじめ、CAUA事務局スタッフの方々を担当され、膨大なエネルギーをつぎ込んでくださっていることを忘れるわけにいかない。この努力に深く感謝したい。